稱讃 二二四号

二〇二一年八月一日発行

親鸞は父母の孝養のためとて、一返にても念仏申したること、いまだ候はず。

『歎異抄』第五条より

七月から八月にかけては、新旧のお盆の時期であり、また、夏といえば、広島・長崎の原爆記念、終戦記念を迎えるたび、お亡くなりになられた方々に思いを寄せる時期であります。

大阪の千里寺さまの寺報（『如是』）に「供養」についてお話なされております。

孝養とあるのは、生きている父や母に限らず、先に亡くなった人に対して追善供養することを言っています。追善とは、亡くなられた人が少しでもその罪の報いを軽く受け、少しでもいいところへ生まれるように、死後を追いかけて善根功徳を亡者のところへ送り届けることをいいます。「供養」はインドの言葉で「プージャナー」という言葉の翻訳です。「心から尊敬する」という意味を持っています。「敬う」ということです。仏陀に対して敬いの心をかたちで表して食事や衣服をさしあげるとか、物をささげることを供養といいます。供養の意味は心からのお敬いということです。ご法事などで「粗供養」という文字を見かけますが、これには違和感があります。謙譲の気持ちを表すためにつかわれているのでしょうが、粗末な供養であれば供養でなくなってしまいます。供養とは心からなる尊敬を表すということです。・・・

浄土真宗において、「供養」という言葉は、使ってはいけない言葉ではないのですが、私が亡き人に対して、幸せを願い、災いを避ける意味で多くは使われているから、なじまないのです。「仏さまとして敬う」という本来の意味から「讃嘆供養」とは、よく使うのですが。お盆をお迎えするにあたり、亡き先人は仏さまとして、実は、いつも私を拝んでくださっていたとあらためて味わうご縁と頂きたいものです。

中木原さんから頂いたアサガオがようやく一輪咲きました。

新型コロナウイルス渦中 暑中お見舞い申しあげます

ワクチン接種後も外出時はマスクをし、三密を避け熱中症の予防に心がけましょう。

発行　浄土真宗本願寺派　稱讃寺
〒一二一－〇〇七五
東京都足立区一ツ家三丁目五番二〇号
TEL　〇三－五二四二－二〇二五
FAX　〇三－五二四二－二〇二六
HP　shousanji.com

稱讃寺

歓喜会法要

去る七月十六日（金）、のんのん法話会に併せて、歓喜会法要（新暦のお盆法要）をおつとめいたしました。

中木原乃既子さんと、高橋八重子さんがご参拝くださいました。十四日に、斎藤キイ子さんが、お参りにおいでくださったのですが、住職と入れ違いになってしまいました。ご懇志、ありがとうございます。

そして、一年三か月ぶりに、鹿児島から帰って参りました住職の姉も含め、四名で「讃仏偈」「正信偈」をおつとめいたしました。

本願寺で「謎解きゲーム」が作成されました。これは、ただ問題を解くだけではなく、出題された謎を解きながら物語を進めていくゲームです。参加者自身が主人公として謎を解いていくことで物語が進行するので、まるで映画や小説の中に入り込んだような非日常体験を楽しむことができるそうですので、チャレンジしてみてください

７月２８日に築地本願寺に参りましたら、SDGｓの取り組みが掲示されておりました。

１　貧困をなくそう

あらゆる場所のあらゆる形態の貧困を終わらせる。

11　住み続けられるまちづくりを

包摂的で安全かつ強靭で持続可能な都市及び人間居住を実現する

16　平和と公正をすべての人に

持続可能な開発のための平和で包摂的な社会を推進し、すべての人々に司法へのアクセスを提供し、あらゆる効果的で説明責任のある包摂的な制度を構築する。

親鸞聖人御誕生八五〇年
立教開宗八〇〇年 慶讃法要 企画

親鸞聖人を知ろう

『親鸞聖人と東国の人々』

今井雅晴氏

報恩の念仏

もう一つ、東国の人々を感動させた事柄があったと思います。それは報謝の念仏です。『正像末和讃』の最後に、次の和讃があります。

如来大悲の恩徳は
身を粉にしても報ずべし
師主知識の恩徳も
骨をくだきても謝すべし

真宗門徒の間でよく知られた「恩徳讃」です。法要の終わりに、あるいは真宗寺院をお参りした最後に必ず皆で唱える習慣です。

親鸞聖人は、阿弥陀仏の恩に対する感謝を教えました。そしてその恩に報じることいい換えればお返しをすべきであることを教えました。そこで真宗門徒は「恩徳讃」を称えて、常に親鸞聖人の教えを思い起し行動に移しているのです。

受けた恩に感謝し、その恩に報いる。それは当たり前のように思いますけれどもなかなか実行し続けるのはむずかしいものです。つい、口だけになりがちです。感謝した、だからいいんじゃないか、という争いのタネにもなりかねません。

しかし親鸞聖人のころの社会は、受けた恩は必ず形にして返さなければいけなかったのです。武士の世界では、将軍が与えた御恩（領地を与えるなど）に対して家来となった武士たち（御家人）は、必ず形に表わして将軍に奉公をしなければなりませんでした。幕府の警備をするとか、戦争には兵力を提供するとか、行事の経済的負担をするとか。御恩と奉公の関係は封建的主従関係として知られており、高等学校や中学校の歴史の教科書には必ず出てきます。

この考え方は将軍と御家人の主従関係についてだけではなかったのです。当時の社会一般の常識であったのです。現代社会には報謝ということばは、普通には使われていません。それに代わることばといえば、感謝でしょう。ただ、感謝ということばは受けた恩に対する喜びの表現であっても、それに対して目に見えるお返しをしなければいけないという意味は希薄です。

しかし報謝にはお返しするという意味が当然のようについています。そして鎌倉時代、報謝ということばは一般的なことばだったのです。親鸞聖人が使い始めたのではありませんでした。だからこそ、特殊なことばではなく一般的に使われていた、やさしいことばを使ったからこそ、東国の人々は容易に親鸞聖人の教えを理解することができ、受け入れることができたのです。

受けた恩にはお返しをしようとではありませんか、それが阿弥陀仏の教えです、念仏の精神でありますというのは、何と新鮮な教えだったことでしょうか。その精神で生活すれば、日常の人間関係はうまくいくことでしょう。親鸞聖人は報謝の念で人々に接したのではないでしょうか。これが親鸞聖人が東国の人々に与えた第二の感動だったのではないかと私は考えています。

信心・信頼と報謝を身をもって示している親鸞聖人。東国の人々が親鸞聖人の教えを聞こうとしたのもごく自然の成り行きだったと思うのです。

おわりに―現代と親鸞聖人―

現代は人間が個人としても、また集団の一員としても壊れかけている時代です。人間関係の回復が重要な課題です。人間への信頼を説き、恩に報いることを説いた親鸞聖人の教えは、さらに重要さを増しているのではないでしょうか。そのことを、親鸞聖人と東国の人々との関係を振り返ることによって、新たに学びなおしていきたいものです。

歴史を知り、親鸞を知る①　『親鸞聖人と東国の人々』今井雅晴氏著　「自照社出版」

毎月「親鸞聖人を知ろう」を掲載します　親鸞聖人が生きた時代の社会のあり方などを通して親鸞聖人のご生涯を訪ね少しでもそのご遺徳を感じれたらと思います

「報恩の念仏」ということで、先月、ご紹介いたしました古川泰龍氏が『「他力」を明かす　続歎異抄・念仏のこころ』で歎異抄第十四章を解説する中で、次のように述べられておられますので、ご紹介いたします。

報恩と謝徳は不二である

ところで私は「一念発起するとき」というのは、「弥陀の光明にてらされまいらする」身になることだ、と言ったのですが、それは一念発起するひとだけが、弥陀の光明に照らされているということではないのです。すべてのひとが平等に弥陀の光明に照らされているのです。ですから、だれもが一念発起するときを迎えることができるのです。

という意味でここの一節も、一念発起の前に弥陀の光明云々を述べたのでしょう。そして、そうなると、報恩謝徳の念仏ということも、報恩謝徳の念仏と思うひとと、思わない（思えない）ひととがあるということになるでしょう。たとえば、弥陀の光明に照らされまいらする身となった一念発起のひとには、報恩謝徳の念仏と思えるでしょうが、いまだそのときを迎えていないひとには報恩謝徳の念仏と思えないでしょう。

しかし、弥陀の光明がすべてのひとを平等に照らしているのなら、すべてのひとの念仏は報恩謝徳の念仏であるのです。ですから、思えないひとも「おもふべきなり」ということになるのです。

ということで、思えないひとも報恩謝徳の念仏と思って称えなければならないのですが、それは決して報恩謝徳のために称えるということではないのです。これは近藤されてはならないことです。

それではその報恩謝徳のために称える念仏と、報恩謝徳の念仏と、その内実はどのように違うのでしょうか。ここでいま一度報恩謝徳の一節を味わってみましょう。

「この悲願ましまさずは、かかるあさましき罪人、いかでか生死を解脱すべきとおもひて、一生のあひだまうすところの念仏は、みなことごとく如来大悲の恩を報じ、徳を謝すとおもふべきなり。」

ここで言う「かかるあさましき罪人」とは、その救われない自己を救うというのが大悲の願だというのです。これは換言すれば、不可能を可能とするということでしょう。しかも人間の知からでは絶望であるものを、大悲の願によって蘇生させよう、というのでしょう。まさに「起死回生の妙術」（教行信証）というほかはないのです

としたら、私たちにとってこれほどのご恩ということはない、ということになるでしょう。そのご恩に報いるために、その徳に感謝のお返しをするために念仏を称えるということになると、報恩謝徳の念仏は、報恩に対する謝徳の念仏ということになるでしょう。

もちろん報恩は信心、謝徳は念仏と言われているのですから、謝徳の念仏でよいのですが、しかし、それでは信心と念仏、報恩と謝徳は二つ別個の、相対的な存在となってしまいます。それでよいのでしょうか。

これに対して、報恩者徳の念仏というのは、報恩の信心がそのまま謝徳の念仏だというのです。それは謝徳の念仏がそのまま報恩の信心だということでもあります。つまり信心に対して念仏があるというのでなく、信心が念仏であり念仏が信心であってこの二つは二つに分けようはないということです。

ということであれば、報恩に対して謝徳があるというのでなく、報恩が謝徳であり謝徳が報恩であって、この二つは不二であるということになるでしょう。

したがって念仏を謝徳のために称えるということはなく、念仏を称えることがそのまま報恩謝徳の信心であるということになるのです。

報恩謝徳とは親心を生きる

ところでさらに、別な角度から報恩謝徳ということを考えてみたいのですが、

たとえば私たちが親の養育の労苦に対して報恩謝徳の思いを持ったとき、その親に対して何を為せばよいでしょうか、何を為すことが報恩謝徳のかたちとなるでしょうか

たとえば親が子と一緒に暮らしたいと言っているのに、子の思いですばらしい別荘を提供したとしても、それは親の喜びとならないでしょう。報恩謝徳が親の喜びと関係なく、子としての気持ちを現わすだけでよい、というのならそれでよいのですがそれでは子の自己満足であって、親にとっては有難迷惑ということになるでしょう。

養育の恩恵を蒙った子として、その親に対して報恩謝徳の思いを持つということはその親に子として出来ることを為して、喜んでもらいたいということではないでしょうか。したがって親に喜んでもらわなければ、子の報恩謝徳の思いも実現しないということになるのです。

としたら子は第一に、何が親の喜びか、子の養育に苦労した親の、子に求める喜びは何か、ということを考えるべきでしょう

そのように考えてきたら、子の為すべき親への報恩謝徳の第一は何か、ということも自ずから判然として来るのではないかと思うのです。

そしてここで考えられることは、まず親のこころを聞くということでなければならないでしょう。いたずらに子の思いを押しつけることではありません。しかも親のこころを聞けば、今日までの親の労苦は、ひたすら子のすこやかな成長を願い、それを生きがいとし、喜びとしてきた、ということでしょう。その親の労苦に、その子が報恩謝徳の思いを捧げるということは、第一にはその親の願いに添って、自ら子としてすこやかに成長を遂げるということでしょう。親はそのことのために今日まで苦労をしてきたのですから、その願いに応えてこそ、親は養育のかいがあったと、その苦労を慰められることになるのでしょう。ですから報恩謝徳の基本的なものは、子として親の願いに添って生きるということのほかはないでしょう。

このように考えてきたら、弥陀の本願という親心に添って、衆生として子として生きるというほかに、報恩謝徳の第一義はないのです。ですから衆生として子として、報恩謝徳の第一義に生きようと思うなら、本願の親心が奈辺にあるかを尋ねなければなりません。

衆生に対する本願の思召し、子に対する親心を知らずして、どうして子として、親に報恩謝徳のまことを捧げることができましょうか。ですから、親鸞は知恩報徳と言っているのですが、何にもまして先決問題となるのは、恩を知るということでありそしてそれに報いるためには、その親の願いを知るということでなければ、子としての謝徳の在り方も決まらないでしょう。

そこで弥陀の本願という、衆生（子）に対する親心を尋ねてみるに、それは大無量寿経、第十八願だったということになるでしょう。

≪設ひ我仏を得んに、十方の衆生、至心に信楽して我が国に生れんと欲し、乃至十念せん、若し生れずば、正覚を取らじ、唯五逆と正法を誹謗せんとをば除かん。≫

ここに示されている本願の親心というのは、「十方衆生のわが子よ、汝は本願の親心から一歩も出られない私の子だ、という私の招換の声を聞いて、汝が親の名を呼ぶ子になってくれなければ、私は親になれない、私は親になりたいのだ」ということです。

もしこの親心が子に徹到して、子がその親心に対して報恩謝徳のこころを持つとしたら、子はそのこころをどのように現わせばよいでしょうか。

その場合報恩謝徳とは、子として親に喜んでもらいたいということですから、その子心が親心を喜ばせるものでなければならないことは言うまでもないことです。

そこでその親心というものを考えてみると、仏は親になりたいということですから子としては、その親になってもらうために努力するほかはない、ということになります。しかも仏が親になりたいということは十方衆生の私たちに、子になってほしいということでしょう。

したがってそのような親心を喜ばせる、子としての報恩謝徳のまことは、子となるほかないでしょう。十方衆生が子となって、親の名を呼ぶとき、はじめて仏は念願の親となることができるのですから、これに勝る喜びはなく、これこそが子に出来る真の報恩謝徳の行ということになるでしょう。本願の親心を聞いて、親の名を呼ぶ子になる、というほかに報恩謝徳の方法も目的もないということで、「一生のあひだまうすところの念仏は、みなことごとく如来大悲の恩を報じ、徳を謝すとおもふべきなり」ということになるのです。

まことに報恩謝徳ということは、浄土真宗の信心そのものであり、念仏そのものであると言っても過言でない、浄土真宗の根幹を為す思想ではないでしょうか。

親鸞自身も『正像末和讃』の中で、

《如来大悲の恩徳は　身を粉にしても報ずべし　師主知識の恩徳も　ほねをくだきても謝すべし》

と、詠嘆し絶唱しているのです。

金子大栄師は、『教行信証講話』の中で次のように述べておられます。

知恩の心、報徳の行

知恩報徳の為に、ーそれはわれらの心を敬虔（けいけん）ならしめ、われらの行を神聖ならしめる純情である。誠に深き自愛の心を破るものは唯だ知恩の涙であり、兎もすれば無視もその「法」を与ふるものこそ、実に如来の本願である。しかせんとする人生に新たなる意義を感ぜしむるものは唯だ報徳の念である。雑想と欲念との苦楽に疲労せる心身も、一念知恩報徳を感知することあらば、今さらに限りなき生命の湧出に悲喜せしめらるる。即ち知恩報徳の情はまさに永遠の生命を獲得せる識心の喜悦である。さればこそ本願の行信を領受せる親鸞は是を以て知恩報徳の為にと思念せしめられたのであった。「の為」は所謂手段としてといふやうなことではない。いかに知報しても知報せりといふことのできぬ恩徳に対して、しかも知報せずしては止みがたき心より知報の道を見出だせる慶喜の為である。

然るにわれらをして知報の念を生ぜしむるものは、必ずしも如来の恩徳にのみ止らぬやうである。われらは父母兄弟の恩愛に恵まれ、知友隣人の恩愛に生く。苟（いやしく）も人間である限り、その恩愛を知報せずにをれぬであろう。ただこの知報の心を忘れしむるものは、生得の自負心である。われらは須（すべから）く常にこの自負心を愧（は）づべきであろう。併しわれらはたとへ深くこの人間的恩愛をすべて悲しむべき迷妄と感ぜしめらるる事すらある。それは「恩愛はなはだ断ちがたく、生死はなはだ尽きがたし」の歎きである。われらは恩愛を否定し、恩愛を純化する「法」を求めてゐるのである。しかもその「法」を与ふるものこそ、実に如来の本願である。

併し恩徳の感知は、単なる「法」から来るものではない。われらの知恩の心を礙ぐるものは自負と小見とであるが、聖道の「法」はこの自負と小見とを砕破（さいは）するものである。それにも拘らずその「法」の発見が直ちに知恩報徳の心を生ぜしめぬは何故であらうか。理想は謙虚を教へ、智慧は小見を砕く。併しその理想はわれに依りて発見せられ、その智慧はわれに依りて獲得せられたりと思惟さるる限り、尚ほ潜在的なる自負と小見とを免れぬ。これ道徳も哲学も真に知恩の心を生ぜぬ所以であらうか。いづれにもせよ単なる「法」は、時にわれらの識心を空虚ならしめ、疲労せしむる。この空虚を充たしての疲労を医（い）やすものは、実に如来の本願である。

故に真実の恩徳は人法の融一せるものである。人にあらずば恩なく法にあらざれば徳なしともいふべきであらうか。誠に本願の名号は至徳を成就せる法である。これに対して大悲の願心自体は苦悩の群生を哀愍する人である。したがって真実に知恩するものは信心であり、真実に報徳するものは念仏である。これ即ち「信心の智慧に入りてこそ、仏恩報ずる身とはなれ」と讃せられ「唯だ能く常に如来の号を称へて、大悲

弘誓の恩を報ずべし」と頌せらるる所以である。かくして真実の行信は、それ自体恩徳にして、また能く恩徳を知報するものである。故に真実の行信は、それ自らを以て知恩報徳たらしめんとするのである。

信心の智慧が仏恩を知ることは、特にそれが深く現実の業障を見るからである。無有出離之縁の深信に響く大悲招喚の声は、真に生命を与ふるの恩徳である。誠に、恩徳はただ疑ひなき心にのみ感知せらるる。感恩の心は即ち無疑の心である。また念仏が特に報徳の行であることは、それが諸善の本であるからであらう。一声称念を外にして一切の生活を鈍化し得るものはない。故に念仏が報徳の行であることは、唯だ念仏のみが報徳の行といふのではなく、念仏してのみ一切の善は報徳の行となることである。唯能常称如来号、応報大悲弘誓恩といふこともかく領解すべきであらう。思ふに親鸞が報徳の行といふときには、特に如来の本願を十方に弘むることにあったやうである。「仏慧功徳をほめしめて、十方の有縁にきかしめん。信心すでにえんひとは、つねに仏恩報ずべし」。「他力の信をえんひとは、仏恩報ぜんためにとて、如来二種の廻向を、十方にひとしくひろむべし」。如来の本願は既に十方衆生を救はうといふにある。併しかかる報徳行は如何にして成就するであらうか。誠に「小慈小悲もなき身」である。その身にして報徳の行を成ずるを得るは、実に称名念仏に於てである。「弥陀の名号となへつつ、信心まことにうるひとは、憶念の心つねにして、仏恩報ずるおもひあり」とは、この心境であらうか。

これに依りて翻って親鸞の言葉を思ふに、宗師曇鸞の釈を披いて、孝子の父母に帰する純情を例として、菩薩の仏に帰する心を述べたるは、まさに恩徳感の「人」より来たることを彰はすものである。言ふまでもなく、ここに知恩報徳の感に満たされてゐるものは「親鸞一人」である。「親鸞一人」が大悲の如来に対向してゐるのである。而してその知恩報徳のために「正信念仏偈」を作らんとするおのである。これを作る所以は、十方の有縁に聞かしめんがためである。されば、動静非己出没必由といふも、述作の本意ただ知恩報徳のためなることを顕はすものである。軽からざる所願は、十方の有縁に聞かしむることであり、神力を乞加するは、即ち称名念仏の心ではないであらうか。古人、動静を以て行信とし、出没を以て往還二相として、それが自力でなく（非己）、他力である（必由）を顕はすものと解するものがある。併し動静出没をかかる意味で説きたる語例もなく、また「この行につかへ、この信を崇めよ」といふとき、動静出没を己にあらざるものたらしむるものこそ、実に行信であると解すべきであるから、動静出没は寧ろ尋常生活を顕はすものと見るが自然であらう。

（昭和二、一二、五）

報恩の念仏

阿弥陀如来は、迷いのなかにある私たちを哀れみ悲しまれ、そのままに救いとるとはたらかれている。浄土真宗の救いは、この如来のはたらきを信じる心一つで定まり念仏は救われたよろこびが声となってあらわれ出たものである。

親鸞聖人は仰せになる。

ただよくつねに如来の号を称して
大悲弘誓の恩を報ずべしといへり

如来は私たちを救いとって見返りを求めることがない。はかりしれない如来のご恩は、決して返すことのできない大いなる恵みである。私たちは、ただそのご恩をよろこび、感謝の思いを声にあらわすばかりである。これを報恩の念仏という。

救いのよろこびを恵まれた者は、報恩の思いから、つねに南無阿弥陀仏と念仏申すべきである。『拝読　浄土真宗のみ教え』

自分に都合の良いことが起こった時の念仏ではなく、何が起ころうとも、自分に邪な思いが起こったときこそ南無阿弥陀仏と称えたいと思います。

稱讃寺　行事予定

二〇二一年　八月の行事予定

一日（日）日曜礼拝　午前十時
六日（金）のんのん法話会　午後二時
八日（日）日曜礼拝　午前十時
一五日（日）日曜礼拝　午前十時
一六日（月）のんのん法話会　午後二時
盂蘭盆会
二二日（日）日曜礼拝　午前十時
二六日（木）のんのん法話会　午後二時
二九日（日）日曜礼拝　午前十時

※お朝事のおつとめ　毎日午前七時
※お夕事のおつとめ　毎日午後六時

偲恩（しおん）
拝（おが）まない　時（とき）も
拝（おが）まれていた

二〇二一年「心のともしび」八月カレンダーより

二〇二一年　九月の行事予定

五日（日）日曜礼拝　休座
六日（月）のんのん法話会　午後二時
一二日（日）日曜礼拝　午前十時
一六日（木）のんのん法話会　午後二時
一九日（日）日曜礼拝　午前十時
二六日（日）日曜礼拝　午前十時
秋季彼岸会法要　午後二時

二〇二一年　十月の行事予定

三日（日）日曜礼拝　午前十時
六日（水）のんのん法話会　午後二時
一〇日（日）日曜礼拝　午前十時
一六日（土）のんのん法話会　午後二時
一七日（日）日曜礼拝　午前十時
二四日（日）日曜礼拝　午前十時
二六日（火）のんのん法話会　午後二時

編集後記

夏休みだというのに、公園から子供たちの声が聞こえてきません。熱中症への予防もあると思いますが、新型コロナウイルスの感染が拡大し続けている所為でしょうか。子どもたちは、うちでオリンピックをテレビで観戦しているのでしょうか。私も？一日中テレビをつけっぱなしで、朝から見ながら、新型コロナウィルスの感染状況を気にしながら過ごしております。オリンピックといえば、開催の直前まで、反対の声が多くありました。開催が近づくにつれ、感染が増え続けました。それに加えて、関係者の言動の問題が惹起したりと、いろいろな問題が起こりました。無観客にするかどうかも、なかなか決まりませんでした。灯火リレーは公道を走らない、観戦しない等の対策をとりながら全国を周り、開催にこぎつけました。私は、折角だからとの思いで、開会式を最初から最後まで見てしまいました。ちょっと感動しましたし、連日の日本のメダルラッシュも喜んでおります。開催から十日程経ちましたが、感染者は更に増え続け、全国で一万人を超えるようになりました。オリンピックの所為だと言う方もおられ、パラリンピックも、もう中止した方が良いという方もおられます。医療の方は逼迫しており、医療従事者の方は疲労するばかりです。ニュースを見れば、オリンピックとは関係なく、行楽地に人が集まっています。オリンピック関係者の送迎をしているボランティアの車が五〇件以上の事故も起きているとのこと。一方、開催にあたって、私など知らないところで黙々と準備してきたご苦労も感じます。オリンピック選手のコメントは、勝敗関係なく、まずは開催してくださったことにお礼されておられました。また競技中の姿を見ると、一喜一憂しますが、清々しくもなれ、力を感じます。今の状況を自分とは関係ないと思わずに、極力、不要不急の外出、三密は避けようと心がけたいと思います。